『紡いだふたつのキセキ』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也

癌が原因で全身の血管に血栓が作られてしまうことはしばしばあり、その現象を初めて報告したフランス人内科医師の名前にちなんで、その病態は「トルソー症候群」と呼ばれている。

梅子さんは、その「トルソー症候群」で多発脳梗塞を発症し、開眼してはいるものの呼びかけに対してほとんど反応がなく無表情で、息子さんが声をかけても無表情に変わりはなく、終日、病院のベッドに横たわり全介助を受けている状態だった。梅子さんと長く二人で暮らしてきた息子さんは、梅子さんを家に連れて帰ってあげたいと思っているようだったが、この状態で家に連れ帰っても果たして本人はどれくらいわかるだろうか…というのが、初めて会った時の僕の率直な感想だった。

息子さんが主治医と面談をした直後に再びお会いした際、息子さんは、開口一番「やっぱり、諦めました…」と、肩を落とし、残念そうに言われた。聞くと、息子さんが退院を諦めた理由は2つあって、1つは「24時間ずっと自分が見張っていることはできない」ということ。もう1つは、「急変した時に母親を苦しませてしまうのが恐い」ということだった。その言葉を聞いて、僕は息子さんに次のように話した。「お母さんを家に連れて帰ってあげたいけれどその2つの理由のために諦めるというのであれば、諦める必要はないです。まず、息子さんが24時間見張っている必要はありません。目を離す時があって構いませんし、逆に入院していても24時間ずっと見張ってなんかいません。必要な時は外出しても大丈夫です。あと、急に痛みが強くなったり状態が変化した時にお母さんに苦しい思いをさせてしまうのではないか…ということですけど、これについても心配はいりません。どういった症状が出てくるのか、あらかじめ予測して準備しておきますので、その点については何の心配もいりません。お母さんに苦しい思いはさせません。むしろ問題は、梅子さんを家に連れて帰っても、家に帰ったことをわかってくれるかどうか…苦労して家に連れ帰っても梅子さんに何か良い変化があるという保証はありません。ただ、それでも一度お母さんを家に連れて帰ってあげたいと息子さんが思われていて、息子さんが言われたような理由でそれは無理だと諦めているのであれば、まったく諦める必要はないということは伝えておきます。」この言葉を聞いて、息子さん曰くは、「頭の中の霧が晴れて行った」そうで、息子さんは母親を家に連れ帰ることに決め、そして、そのお陰で私たちは驚くべき光景を見ることになった。家に帰ってからの梅子さんのあの素晴らしい笑顔、あのチャーミングな表情をなんと表現すればいいだろう。誇張ではなく、入院中とは全く別人の梅子さんがそこに居られた。退院の決断をしてもらって正解だったと、その表情を一目見て痛感した。

また、これは梅子さんが亡くなられた後でご自宅を訪ねた際に息子さんが教えてくれたことだが、息子さんは梅子さんの枕に自分の頭を載せ、母ちゃん、あの時はあんなこと言ってごめんね、などと昔のあれこれを振り返って母親に話しかけては謝ったりもしたらしく、そんな時、梅子さんは首を横に振り、慈愛に満ちた表情で、いいのいいの、大丈夫よ、そんなこと気にしたらだめよ、と言ってくれているようだったとのこと。母親とそんな時間を過ごせたことを、仏壇に飾られた梅子さんの写真に優しい眼差しを向けつつ、息子さんは僕に教えてくれた。

何回目の訪問の時だったか、梅子さんが寝ている部屋の箪笥の上に、ヤクルトスワローズのマスコットキャラクター「つば九郎」のぬいぐるみが置かれているのに気付いて尋ねたところ、「はいそうなんです、母はヤクルトの大ファンなんです！」と。20年前の優勝の時は泣いて喜んでいる母親の姿を息子さんは覚えており、梅子さんは昔から何故か熱烈なヤクルトファンだった。おりしもヤクルトは絶好調で、その頃セ・リーグの首位を独走していた。梅子さんが人生最期の時間を家で過ごした期間は20日間だったが、梅子さんが亡くなる前日の10月26日、ヤクルトはなんと20年ぶりのシーズン優勝を決めた。一緒にテレビ中継を見ていた梅子さんは、息子さんの言葉をそのまま借用すると、「途中からTVの画面をガン見」し、「優勝したこともわかったよう」だった。梅子さんは、大好きなヤクルトの優勝を見届けた。その後、ヤクルトは、両リーグ共に前年最下位のチーム同士の戦いという極めて珍しい日本シリーズを見事に制し、日本一を決めた。梅子さんとヤクルトスワローズの軌跡は互いに交錯し、私たちは奇跡を見たのだった。